



太陽系辺境空域 / *Tales of Known Space*
(1975) / ラリー・ニーヴン (小隅黎訳) / 早川書房
(文庫・6/15刊・¥400)

バーネルとの合作を含めると、ニーヴンの翻訳も本書で七作目になる。アメリカ本国の人気は相変わらず高いし、どうやら、わが国でも評価が上がってきたようだ。

サイボーグ宇宙船エリックと、主人公の物語——「地獄で立往生」ほか一編。火星で発見された原住民と人間たち——「並行進化」ほか三編。太陽系外縁部で、消失する船の謎を追った表題作。その他、臓器銀行やクジン人との出会いなど、計十三編を収録。これら、ノウン・スペース・シリーズ（と呼ばれる）は、人類の進出した宇宙、既知空域（ノウン・スペース）を舞台にとる、一連の年代記風作品群である。

しかし、これほどまで叙情性の薄い未来史シリーズはめずらしい。どれもがアイディアストーリーであることも特徴の一つだ。某評論家は、長編『リングワールド』を「ディズニード的」と評した。これは、本書を含めた、ニーヴン全般に対しても、まさに卓見といえるだろう。一時を楽しく過ごせはするが、とても一生を暮らせない世界なのだ。けれども、人間の生活をディズニードに求めるほうがむしろおかしい。実際、人気の秘密はこの「軽さ」ではあるまいか。（俊）